



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ロシア臨時政府に関する一考察(上) : 特に連立政府に対するエス・エルの動向を中心として
Author(s)	高岡, 健次郎; Takaoka, Kenjiro
Description	In this issue only the first part of this essay is printed. The second concluding part, with the summary of the paper, will appear in the next issue of the same journal.
Citation	スラヴ研究, 12, 59-83
Issue Date	1968
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/4990
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000112897.pdf



ロシア臨時政府に関する一考察（上）

— 特に連立政府に対するエス・エルの動向を中心として —

高岡健次郎

はじめに

第I章 第一次連立政府の成立（以上 本号）

第II章 連立政策の展開とその帰結（以下 次号）

おわりに

はじめに

2月革命の中で成立した臨時政府は、4月には早くも政府危機に陥り、5月初め、カデット、メンシェヴィキ、エス・エルをその主要な構成要素とする連立政府に改組された。10月革命によって臨時政府が崩壊するまでの間に、この連立は、三次にわたってくりかえされ、5月以降の臨時政府の基本的形態となったことは、周知のとおりである。西欧における社会主義者の入閣が、彼らの去勢と墮落に結果したという認識が広く受け容れられていたロシアにおいて、社会主義政党であるメンシェヴィキ、エス・エルが、みずからもそう呼んでいた「ブルジョア政権」としての臨時政府に、一団となって参加したことは、それ自体、一つの問題点を形づくるものであるが、ここに形成された連立政府が、いかなる政治的内容、社会的基盤、階級的性格をもち、三次にわたる反覆の中で、その統治のメカニズムをどのように変化させたかという問題は、依然として検討に値いする重要な問題点であると思われる。これらの問題点を解明することによって、われわれは、2月から10月までを通じて、一口に「ブルジョア政権」と規定し去られることの多い臨時政府の実体を、より具体的に再把握し、ロシア革命の政治的ダイナミクスを、より全面的に追求しうることとなるろう。

しかし、これらすべての問題点を直ちに検討の対象とするには、今のところ、われわれは、あまりに非力である。そこで、これまで多少とも検討の機会に恵まれてきたエス・エルに焦点を合わせ、連立政府に対するその動向に、本稿の分析の主眼点をおくことにした。メンシェヴィキ、カデットの動向を含む上記の課題は、エス・エルの動向の解明に必要な限りにおいて、言及されることとなるろう。以下、われわれは、第I章において、当初連立に反対していたエス・エルが、第一次連立政府の形成に同意するに至る経過と理由を解明し、つづく第II章において、第二次、第三次連立政府の形成へとすすむにつれて、エス・エルが、連立問題に対する態度を次第に変化させていく過程を追跡し、さらに、10月革

命後に出された彼ら自身による連立政策の総括的見解をとりあげ、それに対する若干の検討を試みたいと思う。

本稿の対象をこのように限定して研究史を振り返る時、われわれは、再三ふれてきたラドキーの業績¹⁾に、ここでもまたふれざるをえない。エス・エル党の詳細な歴史的 분석を試みたその労作は、問題を権力問題に限ってみても、他のいかなる研究によっても比肩されることのない、多大の示唆と豊かな判断の資料を提供してくれる。これまでと同様に、われわれは、氏の業績に多くのものを負いながら、以下の記述をすすめることとなる。

第I章 第一次連立政府の成立

(1)

2月革命の動乱の中から生れ出た「ペトログラード労働者代表ソヴェート²⁾」が、真先に、その解決を迫られる核心的問題として直面したのは、革命政府の問題、ないしは、国会臨時委員会が組織しつつあった臨時政府に対する態度の問題であった。

当初ソヴェート内で、この問題の解決に指導的役割を演じたのは、スハーノフ(Суханов, H. H.)であったといわれる³⁾。彼の意見は、一般には、1917年のロシアには、ただブルジョア革命しかありえず、従ってその政府は、ブルジョア政府がありうるのみだという見解として、うけとめられていた⁴⁾。後にスハーノフは、その回想録の中で、これよりはくわしく、そして恐らくは、実際に2月に行った主張よりもより整序された形で、彼自身の見解を展開している。念のために、この見解の要点をも、ここに補足しておこう。彼は、先ず、当時のソヴェートがあるいはとりえたかもしれない一つの立場として、メンシェヴィキのポトレソフ一派ら、ソヴェート右翼の立場、および、「ソヴェート左翼、すなわち、そのポリシェヴィキとエス・エルのメンバー」の立場——遂に独自の定式化を伴って討議の前面に現れることがなく、採決の際には多数派の見解の中に没し去ってしまったそれらの立場——について簡単に要約した後、実際にソヴェートのとりあげるところとなった彼自身の主張を、次のように記述する。ロシア革命＝ブルジョア革命という前提から、直ち

1) O. H. Radkey : The Agrarian Foes of Bolshevism (Promise and Default of the Russian Socialist Revolutionaries. February to October), New York and London, 1958. The Sickle under the Hammer (The Russian Socialist Revolutionaries in the Early Months of Soviet Rule), New York and London, 1963.

2) 3月1日からは、ペトログラード労働者・兵士代表ソヴェートという名称を用いる。なお、本稿の日付は、すべて旧露暦である。(См. Революционное движение в России после свержения самодержавия, Москва, 1957, стр. 190. 以後 После свержения самодержавия と略記する。)

3) Cf. V. Chernov, translated and abridged by P. E. Mosely, The Great Russian Revolution, New York, 1966. pp. 120-121.

4) 例えば、下記の資料集にみられるゼンジノフの記述等を参照。(Selected and edited by R. P. Browder and A. F. Kerensky, The Russian Provisional Government 1917—Documents, vol. I, Stanford, 1961, p. 127. なお、この資料集は3巻よりなるが、以後 Documents I, II, III, と略記する。)

にブルジョア独裁の確立を革命の任務とするのは誤りであり、むしろ社会主義へ向っての「それ固有の政治的前提」を確立していかなければならない。絶望的な崩壊のさなかでの施政の術の体得、ソヴェートに共に對抗するツァーリズムとブルジョアジーの勢力の処理のためには、ソヴェート民主主義は、目下のところ、政権をブルジョアジーに譲渡せねばならないが、その際、近い将来に完全な勝利をかちとる条件を確保すべきである。その条件とは、「国内における完全な政治的自由、組織とアジテーションの絶対的自由」に外ならない。問題の要点は、ブルジョアジーが、かかる条件で権力をとることに同意するかどうかということであり、ソヴェートは、今は、この条件の範囲をこえた過大な要求を提出することによって、ブルジョアジーが政権から手を引くような事態を招いてはならない⁵⁾。

ところで、ソヴェートにその出発点から「臨時政府支持」の足枷をはめたこのスハーノフの主張もさることながら、エス・エルの動向に焦点をすえる本稿の課題からして、若干立ち戻って反芻しておきたい点は、スハーノフが、「ソヴェート左翼」としてエス・エルをボリシェヴィキと並記していたこと、しかも、その見解が明確な定式化をえられぬままに消え去ったという指摘を行っていることである。彼は、別の箇所においても、ソヴェート創立当初の頃、アレクサンドロヴィッチ（Александрович, П. А.）に卒いられるエス・エルのペトログラード組織が、メジライオンツィと協力し合っていたこと、彼らはその「超左翼的立場」をソヴェート内で防衛することも表現することすらもできなかったこと、スハーノフが入手したエス・エル党ペテルブルク委員会のビラには、「労働者階級の政府の樹立」という、ボリシェヴィキの立場と類似した要求が提起されていたこと、等に言及している⁶⁾。アレクサンドロヴィッチは、首都の労働者グループを足場とする初期のエス・エル左派の指導者であるが、ソヴェートにおいては、2月27日の集会で正式の執行委員会が選出される以前の、いわゆる臨時執行委員会の段階から、そのメンバーとして名をつらね、27日の決定に従って、党組織代表の資格で執行委員会に補充されたゼンジノフ（Зензинов, В. М. 右翼中央派）、ルサノフ（Русанов, Н. С. 左翼中央派）と共に、2月革命期のエス・エル党、とりわけそのペトログラード党組織を代表すべき立場にあった。スハーノフの記述は、当時、これらの指導的メンバーの中でも、左派のアレクサンドロヴィッチが、比較的強い影響力を行使していたことを示すものである。

しかし、首都のエス・エル組織に対する左派の優位は、東の間のことにすぎなかった。それを示す重要な一例は、3月2日に召集されたエス・エル党ペトログラード市協議会の、臨時政府信任に関する決議である。この決議は、臨時政府の支持を表明した第一項、ケレンスキー（Керенский, А. Ф.）の入閣に関する第二項、農民同盟の創設をよびかけた第三項、憲法制定議会に関する第四項、の四つの項目から成り立っているが、ここでは、特に最初の二つの項目が重要となる。すなわち、その第一項は、依然として存続する反革命の危険、その中での革命による政治的獲得物の確保という課題にふれ、臨時政府が、公表さ

5) Cf. N. N. Sukhanov, edited, abridged and translated by J. Carmichael: *The Russian Revolution 1917*, London, 1955, pp. 102-107.

6) Cf. Sukhanov, *ibid.*, p. 128.

れたその政綱を遂行していく限り、それを支持することが不可欠であり、政府の組織活動の足元を掘り崩すいかなる試みとも仮借なく闘うことの必要性を表明している。そして第二項は、勤労大衆の側からの臨時政府の活動に対する統制の必要性を考慮して、ケレンスキーの入閣を歓迎し、「現時点の諸条件に関する正確な理解によって喚起された、革命の日々における彼の行動路線に対し、完全なる共鳴の念を表明する」のである⁷⁾。

協議会では、この外、士官に対する警戒心を兵士に訴えた「ペテルブルグ委員会」名のビラの一件で、アレクサンドロヴィッチが強い非難を浴びるという一幕もあり、新しく成立した市委員会の権威ある位置には、ケレンスキー、センジノフ、スヴァチツキー(Святыцкий, Н. В. 右翼中央派)といった人々がついて、首都の党組織の右旋回を少くとも一旦は定着させることになった。この目まぐるしい変転を説明するものとして、一面では、ラドキーも指摘しているように、その会議が不備な代表選出制の下で急遽召集されたという事情、このこともあって、当時エス・エル党へ殺到しつつあった知識層が、労働者グループを圧倒したという事情などがあげられるが、他面では、アレクサンドロヴィッチを先頭とする左派のグループが、まだ自己の主張を貫徹しうるだけの主体的状況にはなかったという事情があげられよう。「労働者政府の樹立」と、たとえ限定がふさされていたにせよ「臨時政府の支持」という二つの行動のスローガンの間には、基本的な相異がある。ところが、エス・エル党の公式の報告では、先にふれた臨時政府を支持する決議が万場一致で通過したとされており、左派の反対の痕跡はみあたらない⁸⁾。

だが、この一見矛盾した態度は、独りエス・エル左派にとどまるものではない。ポリシェヴィキの隊列でも、3月4日の中央委員会ビューローの決議では、臨時政府を「反革命的」と規定し、「民主々義的性格の臨時革命政府の創設(プロレタリアートと農民の独裁)」をその課題としたにも拘らず、次の日の5日、ペトログラード委員会は、「労・兵代表ソヴェートによって採択された臨時政府に関する決議を考慮して」、その行動が勤労大衆の利益に合致していく限り、「臨時政府の権力に逆わない」と決議した⁹⁾。こうした矛盾・混乱の根底には、複雑にしかも激しく変化する革命の混沌が横たわっているのであり、ポリシェヴィキもエス・エル左派も、さらにはこれを否定し去ったエス・エル右派、中央派も、いまだ事態の基本的推移を洞察するには至らず、ポリシェヴィキ・ペトログラード委員会の決議文が象徴的に示しているように、ありとあらゆる意図に発して集ってきたいわゆる「ソヴェート民主々義」の流れに結局は身を委ね、多かれ少なかれ、自己の党派性を喪失する傾向がみられたことを示している。

エス・エル党の中央機関紙「デーロ・ナローダ」紙は、その創刊号である3月15日付の「主張」において、ペトログラード市協議会の決議を党全体の公式の立場として再確認し、さらに次のような論点をそれに補足した。すなわち、臨時政府支持の決議は、隊列の分裂や反革命への懸念といった「消極的動機」によってのみ生み出されたのではなくて、「臨時政府の真摯さを語る宣言」が含む大きな政治的自由、兵士への市民権の保証という

7) См. После свержения самодержавия, стр. 414-415.

8) Cf. O. H. Radkey : The Agrarian Foes of Bolshevism, pp. 139-142.

9) См. После свержения самодержавия, стр. 19, 24.

積極的内容を考慮し、臨時政府を支持し、その政綱を受容する中で、それを通じて、自己の政綱・目的の実現をはかるといふ「積極的動機」によってもまた生みだされたのだ、という主張である¹⁰⁾。これはたしかに一つの新しい論点であり、例えば社会民主主義者が臨時政府の支持を語る場合、ブルジョア革命という大前提から出発してやむなくブルジョア政権の存在を許容していくために、多少とも消極的傍観的支持のニュアンスを帯びるのに対し、そうした前提にとらわれることのない社会革命主義（нео-народничество）の一つの到達点、ありうべき積極的能動的姿勢に立つ支持という態度が顔を見せている。進んで法相というポストを引き受け、その第一歩を政治犯の即時釈放におき、今後「民主主義の代表という資格で私が主張する見解を特に重視」せよと政府に迫ったケレンスキーの行動は¹¹⁾、「デーロ・ナローダ」のいう「積極的動機」を実践的に推し進めた一例ともいえよう。そして、このケレンスキーの立場から、連立政権の積極的支持という立場への距離は、もはや無きに等しいといわねばならない。

しかし、エス・エル党は、その公的全体の立場としては、ソヴェート執行委員会と同じように、政府へのソヴェート代表の正式参加に反対であった。ラドキーは、「恰かも、非社会主義的な暫定的体制を承認したことは革命的原理の放棄を伴わぬことを示すためであるかのように、エス・エルは、当初、連立内閣の考えを拒否した¹²⁾」と指摘している。先にふれたペトログラード市協議会のケレンスキーの入閣を歓迎した決議も、4月3—5日の市協議会では、党の代表としてブルジョア内閣に居坐ることは許せないとして否定された。社会主義者の入閣、連立政権の構成が、社会主義の去勢、革命的波動の後退へと通じた西欧の経験が、ここでは悪しき教訓として引合いにされた¹³⁾。また反面、チェルノーフ（Чернов, В. М.）が社会民主主義者について指摘している「『権力の重荷』という端的な感情¹⁴⁾」が、無論、エス・エルの側には無かったとは思われない。「デーロ・ナローダ」紙の「積極的動機」論が、ケレンスキー流の実践的帰結にまで到達するには今少しの時間を必要としたわけであり、それは、なおしばらくは、「臨時政府を、その宣言された政綱を遂行していく限りにおいて、支持することを緊急にして不可欠であると考え¹⁵⁾」（傍点引用者）といった、典型的な«постольку, поскольку»（「の限りで」）方式による臨時政府支持の正当化を、支え補強する役割にとどまっていたわけである。

こうしてエス・エル党は、様々な曲折、偏差を含みながらも、「ソヴェート民主主義」の大勢に包摂される、臨時政府支持、連立反対という出発点に立つこととなった。ここから、連立政権の推進という第二の出発点に立つためには、いわゆる「エス・エル＝メンシェヴィキ・ブロック」の成立と、4月危機に象徴される階級斗争の進展という、少なくとも二つの

10) Cf. Documents III, pp. 1203-4.

11) 3月2日、ソヴェートの集会で行ったケレンスキーの演説の一部である。（Cf. Documents I, pp. 128-9.）

12) Radkey, *ibid.*, p. 144.

13) Cf. *Ibid.*, pp. 144-6.

14) Cf. Chernov, *ibid.*, pp. 117-120.

15) 先にふれた3月2日のペトログラード市協議会の決議の一節で、「デーロ・ナローダ」紙主張が、そのまま引用再確認している部分。

条件の媒介を必要とする。以下、次節において、この転換の諸条件を一瞥してみよう。

(2)

スタンケーヴィッチ (Станкевич, В. Б.) は、「概括的に云うと、組織的、人間的関係における [ソヴェート] 執行委員会の歴史は、二つの時期に分けなければならない。すなわち、ツェレテリの到着以前と以後の時期である。第一の時期は、完全な偶然、動揺、不安定の時期であった¹⁶⁾」とのべている。シベリアの流刑から帰って「三日目に、ツェレテリは、執行委員会とソヴェートの自信をもった指導者として現れ、原則として国際主義的傾向を保持しつつも、実践的には、防衛主義的行動路線、及び、政府との組織的協働とその支持という路線をきっぱりと遂行していった¹⁷⁾」。この時期区分の底には、ナロードニキ諸党派の右翼に位置するトルドヴィキたるスタンケーヴィッチの防衛主義的視点があるのだが、この時以後、少くとも第一次連立政府の成立する時まで、ソヴェート執行委員会の指導性は、誰よりもよくツェレテリ (Церетели, И. Г.) によって体现されたことは事実であり、しかも、チヘイゼ (Чхеидзе, Н. С.)、スコベレフ (Скобелев, М. И.) らと共に、ソヴェート指導者としての権威をかりて、各地に生れる新しい党組織をその影響下に収め、「かつてのツィムメルワルド派」の国際主義的見地をよみがえらせんとするマルトフ (Мартов, Л.) の勧告を無視して、いわゆる「革命的防衛主義」の路線——イギリス・フランスの側にたってドイツ・オーストリアとの戦争を遂行するという路線に、メンシェヴィキ党全体をひき入れていくのである¹⁸⁾。権力の問題についてのツェレテリの立場は、3月21日付「イズヴェスチヤ」紙に掲載されたその帰京に際しての演説によれば、ブルジョアジーへの権力の譲渡、彼らをして旧制度との斗争へかりたてるためのソヴェートの統制、これを内容とする革命 (ブルジョア革命) をすすめる限りでの臨時政府 (完全な執行権力として) の承認、という古典的マルクス主義の見地を基底とした «постольку, поскольку» 方式による臨時政府支持論であった¹⁹⁾。

ところで、ツェレテリの出現と、それによる新しい局面の開始は、エス・エル党にとっても無縁ではなかった。というのは、シベリア流刑中に、ツェレテリの戦争と平和の問題に対する考え方にすっかり魅せられていたゴーツ (Гоц, А. Р.) が、彼と共にペテルブルクへ帰り、以後も両者の親密な関係を保持しながら、エス・エル党を指導していくことになるからである。ゴーツは、ゼンジノフと同じく、右翼中央派の領袖であり、エス・エルの指導的メンバーの中では、党とソヴェートの実務的指導の点で、最も有能であった。丁度この頃、エス・エル党には、その農業綱領の魅力にひかれた「軍服をきた農民」=兵士の大群と共に、革命の勝利にめざめた大勢のインテリゲンツィヤ、ホワイトカラー、小市

16) В. Б. Станкевичъ : Воспоминанія 1914-1919 г., Берлин, 1920, стр. 87.

17) Там же, стр. 89.

18) Cf. I. Getzler : Martov (A Political Biography of Russian Social Democrat), Melbourne, 1967, pp. 149-150.

19) Cf. Documents, III, pp. 1219-1221.

民が殺到しつつあったが、このいわゆる「3月エス・エル」達は、その出身階層と信条からして、左派の指導者よりもはるかに温和で、かつ党の公的指導者としての声望高かったゴーツ、ゼンジンノフの周囲に結集し、ゴーツ＝ゼンジンノフ・ラインによる党の指導体制に、大衆的基盤を提供したのである。ここに、ゴーツとツェレテリの前述した関係は、かつてのやや個人的な関係の枠を抜け出て、両党間の緊密な関係へと発展する契機たることになる。さらに付言すれば、すでにエス・エル右派は、メンシェヴィキの中産階級ヘゲモニー説、階級協調を伴う防衛主義的信条のとりこに変わっていたから、エス・エル党は、孤立した少数派として後景へ退いた左派を除き、全体として、メンシェヴィキの強力な影響力の前に無防備でさらされることになった²⁰⁾。

こうして、メンシェヴィキとエス・エルは、ソヴェートを舞台に一团となって行動する状況が現れ、自他共に、「エス・エル＝メンシェヴィキ・ブロック」として処遇されることとなった。このブロックの内部における指導的位置には、上述の経過からも推定しうるように、メンシェヴィキ、特に、ツェレテリ、チヘイゼ、スコベレフ、ダン（Дан, Ф. И.）等、メンシェヴィキの右翼的、防衛主義的指導者が立っていた。この点にふれた多くの同時代人の証言からスタンケーヴィッチのそれを引用すれば、彼は、上記の人々を含むメンシェヴィキの指導的資質に種々ふれた後、「ナロードニキは、執行委員会に対して、その第一級の人物——A. P. ゴーツ、B. M. チェルノーフ、И. И. ブナコフ、B. M. ゼンジンノフが現れた後ですら、[メンシェヴィキと]似かよった何物をも与えなかった。彼らはいつも脇に退いている方を選び、執行委員会を指導するというよりはむしろ、それを観望していた²¹⁾」とのべているし、トロツキーは、もっとはっきりと、「メンシェヴィキ＝社会革命党ブロックにおいて、社会革命党が数的に優越していたにもかかわらず、支配的地位はメンシェヴィキに所属した²²⁾」とのべている。これらの証言が一様に指摘しているのは、その指導的資質という点からみるならば、エス・エルの指導者は、メンシェヴィキのそれに数等劣っていたということである。次のようなラドキーの言葉は、この間の事情を鋭く規定したものと見えよう。「メンシェヴィキは、よって立つべき基盤を必要とし、エス・エルは、従うべき指導性を必要とした。それぞれが、他方に欠けているものをもっていった。それは、自然な、それ故にまた、強固な同盟であった²³⁾」。

ここに成立したエス・エル＝メンシェヴィキ・ブロックは、連立政府の組織的基盤としての役割を演じた。われわれは、後に、連立政権が危機に立つ毎に、このブロックがそれを支え蘇生させていくのを見るであろう。しかし、第一次連立政府の形成という点をまず検討せねばならないわれわれは、前節でふれておいたように、その直接的契機となった4月危機についても、若干の言及を必要とする。但し、この事件の全体的経過については他にゆずることにして、ここでは、エス・エル党の動きに焦点をすえながら、その危機が連

20) Cf. Radkey, *ibid.*, pp. 134, 168-170.

21) Станкевич, там же, стр. 84.

22) トロツキー著、山西英一訳、「ロシア革命史」(一)、角川文庫、19頁。同様の指摘は、スハーノフにも見られる。(Cf. Sukhanov, *ibid.*, p. 322).

23) Radkey, *ibid.*, p. 168.

立政権を産みおとすに至る経過のみを探ることとなろう。

ソヴェート諸党派の要求によって、3月28日、臨時政府が「戦争目的についての宣言」（3月27日付）を公表することになった時、外相ミリュコフ（Милюков, П. Н.）は、外交文書としてではなく、単なる市民へのよびかけにとどめることを条件として、その公表に譲歩し同意した²⁴⁾。4月8日に帰国したチェルノフは、まさにこの点でミリュコフに攻撃を集中することになる。彼は、ソヴェート執行委員会で、諸外国では、ロシア政府の対外政策は革命後も何ら変化せず、ツァーリによって締結された諸協定は依然として違背すべからざるものとみなされており、誰一人として3月27日付「宣言」のことを聞いてはいない、という事実を報告し、その後、一連の署名入り論文で反ミリュコフのキャンペーンを展開し、エス・エル党中央、あるいは、ソヴェート執行委員会をして、政府の「宣言」を諸列強に公式に伝達するよう再び要求させる牽引車の役割を果たしたのであった²⁵⁾。チェルノフの外からの攻撃に呼応して、この時、内からミリュコフへの攻撃を開始したのは、ケレンスキーである。ミリュコフによれば、ケレンスキーは、ロシアの国家的利害と固く結合しつつドイツ軍国主義の絶滅、それによる戦争一般の可能性の根絶を説くミリュコフの「平和主義的立場」に対して、祖国という思想すら超えた全世界人民の兄弟の如き関係という願いにたつ「ツィメルワルド主義的立場²⁶⁾」を対置し、更に4月13日、臨時政府はその宣言に諸列強の注意を喚起する通牒を準備中であるという事実無根の報道を流して、事態の促進をはかった。ケレンスキーの「ツィメルワルド主義」は、フリーメーソンの「国際主義者」であるネクラソフ（Некрасов, Н. В.）、テレンチェンコ（Терещенко, М. И.）、さらに、スラヴ主義的な「国際主義者」であるリヴォーフ公（кн. Львов, Г. Е.）、の支持をえて、ミリュコフを孤立させることに成功し、ミリュコフは、3月27日付宣言を公式外交文書として同盟国に発送することに同意した。だが、またしても彼の起草になる「通牒」を添えるという条件つきで。《ミリュコフの通牒》として名高いこの文書が、4月20,21日のいわゆる4月危機の直接的なきっかけとなったことはいうまでもない。彼の「通牒」草案は僅かの修正をへた後、ケレンスキーを含む閣僚の全員一致で承認され、4月18日、「宣言」と共に連合諸国政府へ伝達された²⁷⁾。

《ミリュコフの通牒》の内容に憤激した兵士、労働者は、大規模なデモンストレーションにたち上った。激しい大衆的抗議に包囲された臨時政府と、政府との紛争を望

24) П. Н. Милюковъ : Исторія второй русской революціи, томъ 1, выпускъ 1, Софія, 1921, стр. 86.

25) Cf. Chernov, *ibid.*, pp. 197-8.

26) これは、ミリュコフの規定であって、実際にケレンスキーがツィメルワルド主義者であったわけではない。彼は、国家的利害を強く意識した右翼的な防衛主義者であった。事実、ケレンスキー自身は、ミリュコフが感じていた程、両者の差異を認めていなかったことは、例えば、次のような彼の言葉からも知ることができる。「災わいは、臨時政府外務省の最初の大臣が、自らに課した目的にではなく、彼がこの目的を達成するために選んだ方法にあった」。(В. С. Васюков : Внешняя политика временного правительства, Москва, 1966, стр. 91. より再引用。)

27) См. Милюков, там же, стр. 91-2. Chernov, *ibid.*, p. 199. なおこの《ミリュコフの通牒》の全文は、Революционное движение в России в апреле 1917 г. —апрельский кризис, Москва, 1958, стр. 725-6. (以後 Апрельский кризис と略記する)。

まぬ執行委員会は、共に事態の解決に困惑し、革命後初めて、政府閣僚全員とソヴェート執行委員全員との合同会議を開き、共同でその対策を討議することになった。席上、各閣僚は、交々立って政情の困難を訴えたが、特に首相リヴォーフは、政府は今、ソヴェートによって支えられているというよりも、足元をさらわれているとして、もしもソヴェートが事態をよりよく克服しうると思うのなら、今この場で、権力をその指導者に明け渡す用意があると言明した。これに対して、チェルノーフは、ミリュコーフを文相にでも変えてその能力を生かすという、一種の内閣改造案を提起するにとどまり、ツェレテリも、新たな「通牒」の作成という案をミリュコーフに拒否されると、4月18日付「通牒」の中で特に大衆的抗議の焦点となった二つの点——決定的勝利まで斗い抜くという箇所と、「保障と制裁」という箇所——について、政府が釈明を行うということで妥協した²⁸⁾。これを評してミリュコーフは、「4月18日の通牒と、ソヴェートのツィムメルワルド主義的視点との実在的矛盾によってひきおこされたあの憤激と、このささやかな釈明との間の明白な不釣合は、何よりもよく、ソヴェート指導者の立場の動揺を特徴的に示している²⁹⁾」と述べている。事実、ソヴェートによる権力掌握はもとより、連立内閣の組織ということにすらまだ踏み切れずにいたエス・エル＝メンシェヴィキ・ブロックの指導者にとって、前述のリヴォーフの言葉は、まさに脅迫の響きをもつものだった。動揺した彼らは、大衆行動を鎮静するための「ささやかな釈明」を得たことで満足し、差し出された権力を押し戻して、一旦背後へ退くのである。

だが、臨時政府の側は、ここで立ち止まりはしなかった。4月危機の日々は軍隊の殆んどがソヴェートの掌握下にあることをあらためて立証し、チェルノーフの言う「力なき政府と政府なき力³⁰⁾」という二重権力の実体をさらけ出した。こうした中で、ケレンスキーとミリュコーフの対立に示される閣内の不一致を、後者の方向で統一していくことは、政府の一層の孤立化、無力化を招くばかりである。かといって、前者を仮に外相のポストに据えてみても、「ミリュコーフの通牒」に賛成したことで急速にその人気を失いつつあった状況の下では、政府危機を克服しうる程のものではない。しかも、「政府なき力」が「政府」そのものとなることに、ブルジョアジーはもちろん、ソヴェート自体すら拒否的であるとすれば、活路はただ一つ、ソヴェートの正式代表の入閣をえて、「小ブルジョアのソヴェート多数派との正式の結婚」を行い、その「持参金」（軍隊、その現実的力、直接的信任と支持、行政機関³¹⁾）を獲得することである。ミリュコーフは、ソヴェートとの連立は、第一次臨時政府よりもより権威がなく、より能力に欠けるものになるとして、頑

28) См. Миллюков, там же, стр. 95. Chernov, *ibid.*, pp. 201-202. なお、4月21日付「臨時政府による《ミリュコーフ通牒》の釈明」は、22日、公表された。それは以下の三点からなる。第一、「通牒」は閣議の綿密な討議をへた上、全員一致で採択されたこと。第二、敵国に対する決定的勝利に関する「通牒」の言及は、3月27日付「宣言」でのべられた課題の達成を念頭においていること。第三、「制裁」「保障」という語は、軍備制限、国際裁判所等を考慮して用いられたものであること。（См. Апрельский кризис, стр. 761）。

29) Миллюков, там же, стр. 96.

30) Chernov, *ibid.*, p. 204.

31) Cf. Sukhanov, *ibid.*, p. 330.

強に反対しつづけたが、ケレンスキー、ネクラソフ、テリシチェンコ、更に、両リヴォーフ、ゴドネフ（Годнев, И. В.）は、すでに強固に、連立政権の構想を固めていた³²⁾。4月26日、臨時政府は長文の宣言を發表し、政府はその課題の遂行に努力を尽してきたにも拘らず、無自覚、無組織の分子の直接行動によって、内戦とアナキーが出現していると、危殆に瀕している自由を維持、強化するため、「今まで国家統治に直接的な参加をしていなかったところの、国内の能動的創造的勢力を、責任ある国家的活動へひき入れることによって、政府の成員を拡大する」努力を声明し³³⁾、同じ日、ケレンスキーもまた、エス・エル党中央委員会、ペトログラード・ソヴェート、トルドヴィキ、及び、国会執行委員会に対して、彼一人が入閣した当時の情勢の変化、「組織された勤労者民主主義の力」の増大にふれ、国家統治へのその責任ある参与をよびかけた手紙を送付し³⁴⁾、つづいて次の日、首相リヴォーフは、ソヴェート議長チヘイゼに対して、正式に、連立問題への十分な配慮を依頼した手紙を手交した³⁵⁾。こうして政府の大勢は決し、連立政府が成立するか否かは、かかって、ソヴェート多数派——エス・エル＝メンシェヴィキ・ブロックの態度如何によることとなったのである。

(3)

政府の「宣言」とケレンスキーの「手紙」は、まずエス・エル党に即効的な反応をひきおこした。すなわち、4月26日付「デーロ・ナローダ」紙は、「権力の危機」についての論説を發表し、知らされたばかりの「二つの極めて重要な文書」（政府の「宣言」とケレンスキーの「手紙」）に対するエス・エルの見解を示したのである。彼らは、そこで、革命の当初、権力の構成に能動的であったのはブルジョアジーで、ソヴェートは、旧体制下では組織の機会を奪われ統治の仕事に参与しえず無準備で事態にまきこまれたがために、自分自身を組織化することに集中せざるをえなかったが、今は、「完全に準備が整っている」とは云い難いにしても、当時に比べて「この問題の解決に参与する準備はるかに整っている」と論じ、もしも、臨時政府の現在の構成が古びてしまい、「社会的政治的な創造的仕事にふさわしい国の集团的力のより完全で全面的な姿を示す組織を作ることを、もはや延期することができないとすれば」、それは革命的ロシアが「新しい時代」に入りつつある徴候であると言明した³⁶⁾。

「勤労者のロシアがブルジョアのロシアと結んだ協定に基づいての条件的支持の代りに、はるかにより困難な問題が生じている。すなわち、それは、組織的な二元的構成を、組織的な一元的構成ととりかえることである……。

問題は提起された。それは答えられねばならぬ。勤労者民主主義は、その解決を拒むつ

32) См. Миллюков, там же, стр. 102-3.

33) См. Апрельский кризис, стр. 830-2.

34) Cf. Documents III, pp. 1251-2.

35) См. Апрельский кризис, стр. 833-4.

36) Cf. Documents III, pp. 1257-8.

ロシア臨時政府に関する一考察（上）

もりはないし、それはできない。ロシアの事情は、そうするにはあまりに厳しすぎる。勤労者のロシアは、たとえ、今日まで占めてきた地位を新しいものにとってかえることによって生ずるすべての否定的側面を明確に悟ってはいても、その責任から逃げ出しはしない³⁷⁾。」

この「デーロ・ナローダ」紙の論調は、直接法的表現はさげつつも、エス・エル党が、すでにはっきりと、連立政権の申入れを受けてたつ決意を固めたことを示している。この転換の経過を、若干立ち入って、エス・エル各派の動きに即してみるとすれば、まず、連立問題に関してほぼ一貫した態度を崩さなかったエス・エルの左右両翼の態度にふれる必要がある。一方の翼、エス・エル左派は、もちろん当初から連立に反対であり、この頃にはすでに、アレクサンドロヴィッチに代ってその指導的中核となるカムコフ(Камков, Б. Д.)、ナタンソン(Натансон, М. А.)の帰国をえて、完全に社会主義者から成る政府のみが勤労者の利益を保障するという主張を提起していた。だがそれはまだ、先にふれた孤立の段階を脱しておらず、大衆への影響力はとるに足らなかった。これに対して他方の翼、エスエル右派は、その徹底した防衛主義と反ボリシェヴィズムの立場からして、戦争遂行のためには進んで階級協調の必要を説き、一種の反共統一戦線を提唱する。エス・エル右派の機関紙「ヴォーリヤ・ナローダ」は、その創刊号(4月29日)で、「社会主義政党は、今や、臨時政府へ参加するか、すなわち、革命的政府へ精力的な支持を与えるか、それとも、それを卒直に断るか、すなわち、内戦と戦線での敗北をしつらえることによって国家を崩壊に導くレーニン主義へ間接的な支持を与えるか、このどちらかを公然と明確に選択することを迫られている³⁸⁾」と述べていた。このような右派の連立支持の主張は、全く逆の動機から、平党員の多くを占める兵士の大群に支持されることになる。というのは、4月危機に至る2ヶ月間の経験から臨時政府への幻想を破られた彼らは、その渴望である平和の実現を、社会主義者の大臣に期待したからである。一般に、シテインベルク(Штейнберг, И. З.)も指摘しているように、「民主々義の下部大衆(толщи)」は、「政権への参加を望んでいた。彼らは、その衝動的な階級的感觉とすでに身をもって知らされた幻滅とによって、彼らの諸要求の実現は、政府への圧力によってではなく、それへの参加によって遂行されると感じとっていたのである³⁹⁾」。

こうした中であって、エス・エル党のリーダーシップを掌握する中央派も、革命当初の臨時政府支持・連立政府反対という立場をそのまま維持することは不可能となった。その「積極的動機」論に基づく、臨時政府を通じて自己の政綱・目的の実現をはかるといった主張は、4月危機をへた今は通用しない。それを望むなら、社会主義者が一団となって政府に参加し、直接的にその要求を施策に反映させるという考えの方が、はるかに説得的である。これが、中央派をして、右派、兵士を中心とする連立支持の与論に同調せしめ、全体として党の政治路線を転換させた第一の事情であろう。しかし、この転換を、こうし

37) Documents III, p. 1258.

38) Documents III, p. 1257.

39) И. Штейнбергъ : Отъ февраля по октябрь 1917 г., Берлинъ-Миланъ, стр. 21.

た変転する政治的局面の一時的事情から理解するだけでは、なおまだ充分とはいえない。なぜなら、連立政府の構成へと進むことは、「ブルジョアのロシア」に対する「勤労者のロシア」の「条件的支持」——政治的には、ブルジョア政党に対する社会主義政党の条件的支持——に代えて、両者の直接的な「一元的」な協働関係を設定することを意味するが、このような政策・行動は、エス・エル党本来の伝統的立場からすれば、ありうべからざる原則的な背理だからである。すでにその第一回大会（1905年12月29日—1906年1月4日）は、他党との関係を規定する戦術を論じて、「反対党（ブルジョア政党の如き）とは、いかなる協調も行わず、完全に非妥協的にそれらに対処すること⁴⁰⁾」を万場一致で決定している。こうした態度の基底には、「専制的官僚、貴族、財閥」対「プロレタリアート、勤労農民、インテリゲンツィヤ」という「二つの敵対的な『三者同盟』」の対抗という現状規定、後者による権力の獲得、すなわち、社会主義政党に統一された「労働者階級」の政権の樹立（勤労者革命）とその後の建設的な社会主義的改造という革命の性格づけと展望、この「権力獲得の瞬間」によって区別されるところの二つの段階に対応する、最小限綱領・最大限綱領という二種類の革命的課題の規定、などから成り立つ戦略的見地があった⁴¹⁾。それは、第一回大会でチェルノフが誇らかに語ったように、「ブルジョア革命」から「社会主義革命」へという展望に立つ社会民主主義者の二段階革命の戦略とはたしかに異っており、「理論的には明確な図式と区別も、実生活においては一連の見分け難い過渡点と交わりうる⁴²⁾」ことが予見されているとはいえ、明らかに一種の一段階革命の見透しに立脚する独特な人民革命・勤労者革命の構想であった。

今、エス・エル党が、カデットに代表されるブルジョア政党と連立し、「集团的力」となって活動せんとする態度をとりえたのは、4月危機に示された情勢の激化の中で、この伝統的な革命の戦略戦術を忘れてしまったからなのだろうか。あるいは、政治的局面の要請が、知っていてそれを無視させたのだろうか。恐らく、このいずれもがありえたであろう。だが、われわれがここで注目したい点は、このいずれでもない側面、すなわち、革命の坩堝の中で現れた、革命の戦略そのものに対する従来とは異った新しい認識という側面である。この新しい認識を最も良く示しうるものは、1917年になってしばしば用いられた「政治革命」、「社会革命」という概念であろう。これらの概念を意識的に活用したのは左翼エス・エルであって、彼らは、これによって、自派とエス・エルとの相異を特徴づけ、エス・エルの政治的限界を批判していったのであった。それによれば、かつてふれたことがあるように、「政治革命」と「社会革命」を、それぞれ、「最小限綱領」と「最大限綱領」の実現に対応させ、左派を除くエス・エルは、前者の立場、すなわち、「政治的改革」以上の変革を恐れてブルジョアジーと協調し、労働者、勤労農民の要求を裏切った、とする

40) Протоколы первого съезда партии социалистовъ-революционеровъ, 1906, стр. 342.
(以後 Протоколы I と略記する。)

41) См. Протоколы I, стр. 139-141, 253-269, 355-6 その他。なお、ここでいう「労働者階級」とは、一方の「三者同盟」、すなわち、プロレタリアート、勤労農民、インテリゲンツィヤと同義であることは、かっても指摘した通りである。

42) Протоколы I, стр. 255.

のである⁴³⁾。彼らにいわせれば、ただエス・エル左派とボリシェヴィキのみが、「革命の当初から勤労大衆の綱領を自己の綱領とし」、「ロシア革命を直ちに社会革命と規定した⁴⁴⁾」とされる。この左翼エス・エルの批判的主張は、とりわけ、エス・エル右派について、その妥当性を見出しうる。右派は、2月革命を、祖國の敗北を防止せんとする愛國的な企図に発するものと評価し、当時からすでに、革命の目的を、勤労者の利益をめざす経済関係の変革にはおかず、単に、社会的斗争の展開を利する舞台としての民主的共和国の樹立に限定することによって、事実上、「社会革命」の信条を放棄していたからである⁴⁵⁾。

だが、エス・エルの主流を形成する中央派については、左翼エス・エルの批判を超えるより複雑な主張点を含んでおり、若干の補足を必要としよう。中央派の理論的支柱であり、さらに云えば、左翼中央派の領袖であるチェルノフは、10月革命を経過した後の第四回党大会(1917年11月26日—12月5日)の席上でではあるが、ロシア革命の基本的性格に関して、社会民主主義者の理解をエス・エルのそれと対比しつつ次のように述べた。「この〔ロシア革命の〕行動の路線は、政治革命として、ブルジョア民主主義革命として開始しているわが革命を、この段階から導き出して、それを勤労者革命とするであろう。土地に対する私的所有権を廃絶して、それは、ブルジョア的所有権の城砦に巨大な突破口を切開き、まさにそのことによって、ある移行期を切開いていく。マクシマリスト的社会革命の時期ではなく、純粹にブルジョア的なウクライアの時期と、将来の社会主義的改造の時期との間に横たわる移行期⁴⁶⁾。」(傍点引用者)。また彼は、「現時点に関する決議」の原案の冒頭で、「ロシア革命は、その本質と課題からして、ブルジョアジーと勤労人民との統一された力によって遂行されるブルジョア革命ではなくて、広範な社会的内容を伴う革命であるという視点から出発する時、そこから生み出される当然の結論は、一つの政府に有産者のロシアと人民のロシアの代表が共存するというを、ただ移行期の一段階としてのみ、歴史的に受け容れうるものとする⁴⁷⁾」(傍点引用者)と述べている。これに類する他の出席者の主張・発言を、われわれは随処に見出しうるのであるが、引用は以上にとどめて、そこから知りうる彼らの革命の基本的性格に関する主張点を整理してみるならば、ほぼ次のようになろう。まず、ロシア革命は、「政治革命」(＝ブルジョア民主主義革命)として出発する(あるいは出発した)こと、しかし、それは不可避免的に「勤労者革命」となること、「勤労者革命」は土地の社会化を含む「広範な社会的内容を伴う革命」(＝「社会革命」)であること、さらに、この「社会革命」は「マクシマリスト的社会革命」(社会

43) 拙稿、「左翼社会革命党の成立をめぐる」(『北大史学』第10号)、54-6頁参照。См. Протоколы первого съезда партии левыхъ социалистовъ-революционеровъ (интернационалистов), 1918, стр. 21-2, 72. その他。

44) Штейнберг, там же, стр. 13. 傍点は原文で活字をはなして強調されている部分。

45) Cf. Radkey, *ibid.*, pp. 165-6.

46) Краткий отчетъ о работахъ четвертаго съезда партии социалистовъ-революционеровъ, Петроградъ, 1918, стр. 23. (以後 Краткий отчет IV と略記する。)

47) Там же, стр. 123.

主義革命)とは異なること⁴⁸⁾、この「勤労者革命」は、ブルジョア社会と社会主義的改造期との間の「移行期」を切開いていくものであること、以上である。ちなみに、この「移行期」から「社会主義的改造期」(社会主義社会)へ至る道程は、もはや、それ以上の破局や革命なしに、平和的に、漸次的に転化しようと考えられていたことは、かつてふれた通りである⁴⁹⁾。

こうして、エス・エル中央派は、エス・エル党が創立当初に指定した、「専制的官僚、貴族、財閥」の支配→「勤労者革命」(「労働者階級」による権力獲得)→「社会主義的改造期」、という革命の展望から、革命の現実におく中で、「専制的官僚、貴族、財閥」の支配→「政治革命」→「勤労者革命」(「社会革命」)→「移行期⁵⁰⁾」→「社会主義的改造期」、という展望へと認識をすすめた。この変化は、明らかに、2月革命という既成事実の前に立たされた結果としての変化であるが、同時に、この認識の変化は、現実への対処の仕方の変化としても現れる。さし当って、権力の問題、より具体的には、連立政権の問題に対するエス・エルの態度を検討しているわれわれにとっては、臨時政府(ブルジョア政権)の成立とエス・エルによるその承認という事実が、「政治革命」という新たな中間項を設けさせる背景となっていることに留意せしめられると共に、「政治革命」から「社会革命」へという認識、さらにそれによって切り開かれる長い「移行期」という認識が、エス・エルの連立問題への対処をその根底において規制していくという反面をも見逃すわけにいかない。「政治革命」から「社会革命」へという展望については、「社会革命」の内容が社会主義革命とは区別されているために、当初の一段階革命の展望から二段階革命のそれに变化したとまではいえず、むしろ、一連の革命における二つの段階という表現がより適切ではあろうが、いずれにしても、この第一の段階は、かつての専制的官僚的政治体制を破碎して、新たな民衆の民主的政府の骨組を創るという点で、ブルジョア政権ないしブルジョアジーとの連立政権の存立は、理論的に完全に承認される可能性をもつ。また、第二の段階、「勤労者革命」によって切開かれる「移行期」についても、その内容をなす「土地の社会化」をはじめとする社会的経済的改革が、ブルジョアジーの利害と相対立することは確かであるが、まだ「社会主義的改造期」ではなく、しかも、平和的漸次的な進化の過程と把握されているという点で、ブルジョアジーと勤労人民との力関係の如何

48) マスロフの次のような発言をつけ加えておこう。「われわれは、わが革命は、たしかに巨大な社会的内容(土地の社会化を遂行する可能性)をもってはいるが、社会主義革命ではないという点で、すべて一致している」。(Краткий отчет IV, стр. 105).

49) 拙稿、「エス・エルの農業綱領の性格とその結末について」(『歴史学研究』No. 272), 31頁参照。

50) この点で注意を要するのは、「勤労者革命」と「移行期」の関係を、単純に、時間的に継起する異った二つの時期と捉え得ないということである。この時期のエス・エル中央派は、「勤労者革命」、「社会革命」を、革命的「瞬間」とは全く異った一時代として考えており、その意味では、この革命は殆んど「移行期」そのものですらあった。後にチェルノフは次のように述べている。「彼ら[エス・エル]は、資本主義と社会主義の間に純理的な境界線をひく代りに、『勤労主義』("laborism")の長い移行期を心に描いた。プロレタリアートと農民の同盟は、徹底した政治的民主主義をもち、次第にその形式を深い社会的内容でみたしていく、この『人民主義的勤労』革命("populist-labor" revolution)をなしとげることができた」(傍点と括弧内の部分は引用者)。(Cf. Chernov, ibid., p. 114).

ロシア臨時政府に関する一考察（上）

.....
によっては、なおまだ連立政権の過渡的存在を認めうる理論的余地を残すのである。先に引用したチェルノフの決議案においても、「移行期の一段階としてのみ」という限定がふされているとはいえ、連立政府の存在が容認されている。

ところで、エス・エル中央派は、一連の革命における二つの段階、「政治革命」と「社会革命」の転換点を、具体的な歴史過程の中では、どの時点に求めていたのだろうか。この点を探る上で一つの示唆を与えてくれるのは、第一次連立政府の成立を評して、それは、すでに民主的な政治的枠組を創る時期が終り、それに社会的内容をみたま時期に登場したとし、次のようにその「不幸」を指摘したチェルノフの言葉である。「統一した行動の時期と分離の時期は当然の順序に従って継起した。しかし、政府を組織する点では、この順序はあべこべに現れた。統一した行動をすべき時期には、自由主義的民主主義〔ブルジョアジー〕と勤労者民主主義は分裂せしめられていた。彼らが力を統一した時には、すでに、彼らの必然的な分離の時節がきていたのである⁵¹⁾」。この指摘からすれば、第一次連立の成立期にはすでに、第一から第二の段階への転化が生じていたと把握されていたことになる。但し、この指摘がなされているのは、革命から20年近くの歳月が過ぎ去った後であることに、注意せねばならない。チェルノフは、上記の理由から、連立政府の不毛の結果を当然のこととして結論づけていくが、実際には、10月革命の直後の時期には、第一次連立をこのようにみてはいないし、さらに10月以前、それが成立した時期には、大いにその必要を弁護すらしているのである。一般的にみて、連立政権に対する評価は、時と共に、それが大衆的孤立を深めていくがために、そしてまた、10月革命の後には、ポリシェヴィキに決定的な敗北を喫する主要な原因が連立政策にあったという悔悟の念が深まっていくがために、時と共に否定的になっていく傾向があり、チェルノフの上記の指摘も、こうした傾向の一例として、彼の評価の否定的極限值を示しているのである。だが、時の経過が生み出すエス・エルの連立政権に対する態度の変化の具体的検討は、第二次、第三次連立政権の成立期、さらに、10月革命後のエス・エル自身によるその総括を対象とする第二章の課題である。ここでは、さし当り、これまでに検討してきたところの、エス・エル中央派の戦略的見地に関する新たな変化の確認の上に立って、エス・エルが、革命当初の連立政権反対という態度から、賛成へとその態度を変えた理由は、単に、さし迫る政治的局面からの一時的要請にとどまらず、革命の性格、及び、革命の展望に関する基本的認識の進化をその思想的酵母として、結党以来の伝統的なブルジョア政党への態度の転換を可能にしたということを指摘しておくのとどめておこう。

(4)

こうしてエス・エルは、右派と兵士の強い要求をその推進力とし、日下の政治的場面からの実践的要請を革命に関する基本的認識の進化によって支えながら、連立政府の構成、カデットをはじめとするブルジョア政党との協働関係の設定を決意したが、しかし、まだ

51) Chernov, *ibid.*, p. 209.

単独でこれを実行するところまでは踏み切れなかった。エス・エル中央派の指導者は、ソヴェートの指導的多数派として緊密なブロックを形成している一方の僚友、メンシェヴィキの同調を、連立政策実行の不可欠の条件と考えたのである。4月27日に、チヘイゼがリヴォーフから手紙を受けると、エス・エル＝メンシェヴィキ・ブロックの若干の指導的メンバーは、ソヴェート執行委員会の総会に先立って、スコベレフの家に集り、連立問題に関する予備的討議を行った。アヴクセンチェフ（Авксентьев, Н. Д.）と共に、エス・エルを代表してこれに出席したゴーツは、席上、まだ正式の決議はなされていないが、エス・エルの党員の多くは入閣に賛成しており、メンシェヴィキがこれに同調するよう懇請しているということを伝え、次のように発言した。「わが党もまた、ヨーロッパにおける右翼社会主義者の『政府党员』的傾向をロシアの地へ移植せんとするいかなる試みとも斗ってきた。それにも拘らず、われわれが、今日、政府へ参加する用意があるとすれば、それは、ロシア革命の例外的環境にのみ帰因する。ソヴェートと政府との間の何らかの不一致が政府の存在そのものを危機に陥し入れる時は、ソヴェート代表の内閣への参加は、ブルジョアジーに対する人質の引渡しを意味するのではなく、革命的民主主義の政策の再主張を意味するのである。しかし、周囲の事情で、われわれは諸君と同様の諸困難に直面している。このような条件の下では、われわれは、諸君がわれわれと共にそれを分担する場合にのみ、政府へ参加する重荷を負うことができる⁵²⁾」。

これに対して、メンシェヴィキの代表は、依然として自派の入閣を拒む姿勢を崩していなかった。チヘイゼは、今はいかなる政府も「一夜のうちに」平和の回復や急進的改革をなしえず、自派の入閣は、大衆の中にやがては幻滅に転ずる期待をひきおこすだけだと論じ、ロシアは農業国であり、革命は何よりも農民革命なのであるから、「いかにして政府の基盤を拡大するかという問題は、農民の代表を含めることによって、最も自然な形で解決されるだろう。われわれの同志であるナロードニキとエス・エルを、執行委員会のメンバーとしてではなく、農民の代表として、政府へ参加させよう⁵³⁾」と主張した。また、ツェレテリも、政府の強化が現時点の最も緊急の課題であることを認めつつも、経験は、「政府に併呑されていないソヴェート」のみが激し易い民衆に可能な最大の影響力をもちうることを示したとし、政府への参加によって、大衆の中にわれわれの完遂しえない希望を生み出すならば、それは、極左的傾向の強化をもたらすだけだと述べ、チヘイゼと同様、「エス・エル党の支持者の中にはわれわれ自身の支持者と同じように、政党やソヴェートとではなく、協同組合や労働組合や農民と組織的な結びつきをもっている多くの民主主義的分子がいる。この民主主義的なインテリゲンツィヤの代表が、閣内でミリュコーフやグチョーフととって代りうるならば、それは、政府とソヴェートとの政策の完全な調和をはるかによく保証し、われわれに、より大きな決意をもって政府を支持することを可能にし

52) I. Tseretelli, Reminiscences of the February Revolution—The April Crisis, (The Russian Review, Vol. 15, No. 1, pp. 39-40).

53) Tseretelli, *ibid.*, p. 39.

ロシア臨時政府に関する一考察（上）

よう⁵⁴⁾」と主張したのである。これらの発言がよく示しているように、彼らは、連立政権を構成して政府の危機を救う必要性をよく知りながらも、それによって大衆の支持を失い、「極左的傾向」、とりわけその最大の敵手であるボリシェヴィキの影響力が増大することを恐れて、連立政府の大臣という危険な配役はエス・エルにふりあて、自分達は、無力な政府とは関係のない、変ることなき大衆のスターとしての座にとどまろうと考えたわけである。

4月28日に開かれたソヴェート執行委員会は、連立問題についての最初の討議を行ったが、エス・エルの指導者は、メンシェヴィキと論議を斗わせるのを差控え、連立政策を擁護する見解は、スタンケーヴィッチ、スハーノフらによって、最も生々と提起された。スハーノフもまた、ロシア革命の「例外的」事情——これまでも事実上の国家権力の担い手はブルジョアジーではなく、「民主主義」であり、社会主義者は、もともと、政府の行った政策に対する責任から逃れえない立場にあったと考え、連立の形成によって、これまで政府との階級斗争を抑えてきたソヴェート多数派が正式に政府の一部となることは、一面では、階級斗争の発展とソヴェートの真の民主化をもたらし、他面では、政府に中間層の協力をえさせて、国家機構の活動力を再建させようと判断し、連立政府の創設を強く支持するに至っていたのである⁵⁵⁾。だが、ツェレテリをはじめとするメンシェヴィキの指導的メンバーが反対したため、多数派を構成するエス・エル＝メンシェヴィキ・ブロックの票が割れ、僅少の差ではあるが⁵⁶⁾、連立政府の構成は、一旦執行委員会によって否決されることになった。「エス・エルのグループは、殆んど一体となって連立賛成に投じたが、ゴーツは、微笑をうかべながら、これみよがしに連立反対に挙手をした⁵⁷⁾」。彼は、あえて自説を留保し、エス・エル＝メンシェヴィキ・ブロックへの忠誠を示したのである。

しかし、流れに抗したメンシェヴィキの連立反対という態度は、このあと僅か2日にして崩れ去った。4月29日、陸相グチコフ（Гучков, А. И.）の辞職という事態がおこり、さらに最高司令官も行動を共にしようとしているという噂が広がった。「革命的防衛主義」の立場にたつツェレテリらにとって、戦時中に、閣内での討議もへずに陸相がその職を放棄するに至ったことは、極めて「センセーショナル」な事態として受けとめられたが、次の日、ペトログラードの士官代表団が執行委員会を訪れ、グチコフの辞職が前線の司令官達の辞職につながるならば、軍の内部に不安、騒動をひきおこすにちがいないとのべ、これを予防する唯一の道は、ソヴェート代表を含む強力な政府の形成以外にはないと申入れるに及んで、彼らは、事態の深刻さを一層強く感じとらざるをえなかった。翌日の5月1日、首相リヴォーフの要請によって彼と会談することになったツェレテリは、すでに面談する以前に、必要とあらば連立政府の構成を受諾しようという決意を固めていた。ツェレ

54) Tseretelli, *ibid.*, p. 41.

55) Cf. Sukhanov, *ibid.*, pp. 331-3.

56) 票決の結果については、その資料によって、23対22（保留8）と、24対22（保留8）という二種類の記述がみられる。この日の執行委員会の議事録は、「ペトログラード労働者・兵士代表ソヴェート一会議議事録」にも欠けているため、われわれは、今のところ、どちらとも判定しえない。

57) Tseretelli, *ibid.*, p. 43.

テリとの会談の席上で、リヴォーフは、グチコフの辞職は内閣に深刻な衝撃を与えたこと、ソヴェート代表の直接的な参加以外のいかなる政権の拡大も考えられぬこと、もしもこの二度目の訴えも拒否された場合は、内閣は直ちに総辞職を行うということを伝えた。ここに至ってツェレテリは、執行委員会による重ねての連立への反対は、政府の総辞職、危機の加重をもたらすのみであると考え、その同僚と共に、もはや連立の提議の受容を躊躇すべきではないと決断したのである⁵⁸⁾。

5月1日の夜から翌朝にかけて、ペトログラード・ソヴェート執行委員会は、連立問題に関する二度目の討議を行うために集った。特に招かれたケレンスキーによる状況報告、その他の執行委員による経過の説明、それにひきつづく討議を行った後、事の賛否の決定は、一先ず、各党派毎の集会に移された。ここで反対したのは、ボリシェヴィキの集会のみであった。問題は再び全体集会に戻されて採決が行われたが、結果は今やいうまでもないことながら、28日の決議は覆がえり、44対19（保留2）という大差をもって政府への参加が決定された。反対したのは、ボリシェヴィキの外に、3人のメンシェヴィキ・インターナショナリスト、及び、4人のエス・エルである。次いで会議は、もう一度各党派毎の集会に移され、政府へ参加する際の「条件」が検討されたが、全体集会には、メンシェヴィキによって作成された原案が提出され、ゴーツが、エス・エルとトルドヴィキを代表して、その全面的支持を表明し、その後、若干の修正提案の審議をへて、最終的成案は、特別委員会に付託された。最後に執行委員会は、各党派の代表によって構成された、臨時政府との交渉に従事する10名の委員会を選出して散会した⁵⁹⁾。この日の議事録の最後には、その歴史的な決定の行末を予告した次のような少数意見の記録がふされた。「ロシア人民の救済は、ロシアの資本家・地主の利益の保護や『同盟』諸国の帝国主義とはきっぱりと絶縁する、一連の革命的な内外政策によってのみ保証されうる。これらの施策は、全権力を労兵代表ソヴェートへ移した時にのみ、敢然と誠実に、実施されるであろう。民主主義とプロレタリアートの勢力が帝国主義的ブルジョアジーの勢力に圧倒される連立内閣は、この条件に適ってはいない。それ故に、われわれ、ソヴェートの少数派は、ソヴェート代表の内閣への参加に反対し、この声明を会議の議事録に加えておくよう要求する⁶⁰⁾」。

(5)

執行委員会によって選出された10名の委員会は、直ちに政府との交渉に入った。交渉の眼目は、いうまでもなく、先にふれた連立に應ずる際のソヴェートの「条件」と、閣僚の人選問題である。ソヴェートの「条件」は、8項目の政綱をその骨子としていたが、受

58) Cf. Tseretelli, pp. 45-7.

59) См. Петроградский совет рабочих и солдатских депутатов (Протоколы заседаний), Москва-Ленинград, 1925, стр. 130-1. (以後 Петроградский совет と略記する) なお、10名の交渉委員の内わけは、5人のメンシェヴィキ (Чхеидзе, Церетели, Богданов, Дан, Войтинский), 2人のエス・エル (Авксентьев, Гоц), 2人のトルドヴィキ (Станкевич, Брамсон), 外にエヌ・エスが1名 (Пешехонов).

60) Петроградский Совет, стр. 131.

ロシア臨時政府に関する一考察（上）

容された際には、当然、新政権の遵守すべき政綱として一般に公布されるべきものと考えられていたから、それは、實際上、生れいずるべき新連立政府の「宣言」案の骨子でもあった。これがよみあげられた時、テレシチェンコとネクラソフは、その満足の意をかくさず、直ちに閣僚の人選問題へ移ろうと提案した程であった⁶¹⁾が、リヴォーフはそれを抑え、あとから急いでかけつけてきたミリュコフ、シンガリョーフ（Шингарев, А. И.）、モスクワから戻ってきたマヌーイロフ（Мануйлов, А. А.）を加えて、一旦閣議での審議を行うことになった。ソヴェートの「条件」は、この3人を中心とする閣僚の一部、さらに国会の代表とカデット中央委員会からの批判や反対提案の中で、僅かながらその姿を変える。まず、人選問題に先立って、その間の模様を一瞥しておこう。

「条件」の第一点は、これまでの中心的な係争点であった対外政策の問題で、そこには、周知のようなソヴェートの定式——無併合、無償金、民族自決の原則にもとづく全般的講和の早期達成、という定式と、「3月27日付臨時政府宣言に基づく、協定の再検討をめざして、同盟諸国と交渉する準備を整える」という要求が含まれていた。これに対してカデットは、「同盟諸国との完全な一致の中で」戦争と平和の問題を解決するよう要求していたが、結局、講和に関するソヴェートの定式を注解するものとして、3月27日付政府宣言の内容を引合いに出すこと、後半の部分は、より莫然とした「同盟諸国との協定への予備的方策を企画する」という表現に改めることで、妥協した⁶²⁾。つづく「条件」の第二点は、ミリュコフの云う「ツィムメルワルド主義の第二のテーゼ」、「軍隊の民主化」という言葉にはじまっているが、これにはすでに、当時のソヴェート指導層の「防衛主義」的見地を示す「ロシアのありうべき敗北を防ぐために、軍の戦闘力と、防衛的及び攻撃的行動への能力を整え強化すること⁶³⁾」（傍点引用者）という一句が含まれていた。トロツキーは、これを、宣言の中で「たった一つ真剣味」をもち、連立政府を樹立した意義全体を「この一語のうちに総括」したものと評したが⁶⁴⁾、たしかに、ブルジョアジーが連立に期待した積極的狙いの一つは、ソヴェート指導者が閣僚として「この一語」を遂行し、軍隊に広がりつつある反政府的気運を一掃することにあつたことは疑いをいれない。従って、この部分は、互譲による一致点としてではなく、一致した相互の積極的主張点として、そのまま、政府の宣言の中にもりこまれていった。

この外、ソヴェート代表の「条件」には、ミリュコフが、「表向きには問題にならないが、そこにこめられる内容如何によっては大いに問題となりうる」とした3つの点があつた。すなわち、「生産物の生産、輸送、交換、分配に対する統制の確立によって」経済的混乱を克服する問題、「国民経済の利益にたつて土地利用を調整し、勤労者の手への土地の移譲を準備する農業政策」の問題、及び、「財政負担を有産階級へ転嫁すること（戦時超過利潤への課税、財産税等々）をめざす」民主的な税制改革の問題である。カデット

61) См. Станкевич, там же, стр. 128.

62) См. Миллюков, там же, стр. 109, 122.

63) Петроградский совет, стр. 327.

64) Троцкий, 前掲書, 196頁参照。

は、これらの背後に、「産業に対する社会主義の実験」、土地利用の土地委員会への委託といった企図を感じとり、臨時政府のなすべき限界をこえて、憲法制定議会の任務を先取りするものと警戒したが、結果的には、これらの諸点は、「統制の確立」が「統制のなご一層の計画的導入」に変えられ、土地移譲の問題は憲法制定議会に委ねて、「このための準備作業を遂行」すると改められ、税制改革の問題では、「有産階級への直接的課税の強化に特別の注意を払う」と云いかえられる程度の、まさに「きわめて些細な譲歩」によって通過した。「条件」にもられた8項目の政綱のうちの残る3点、「労働の全面的擁護」、「民主々義的自治の設定と強化」、「憲法制定議会の早期召集」という点については、何の問題もおこる筈もなく、そのまま政府の宣言にもりこまれた⁶⁵⁾。

以上にみる如く、ソヴェート代表の「条件」は、交渉の過程でたしかにその姿を変えたとはいえ、実質的には「極めて些細な」変化にとどまった。それは、「条件」を作成するに当って、エス・エル＝メンシェヴィキ・ブロックの指導層が、すでにもともと、「一夜のうちに」人民の要求を実現することは不可能であるという見透し、革命的手段によってではなく、力関係の推移の中で漸進的に事を解決するという妥協を予定した立場に立っていたからであり、しかも、軍の戦闘力を高めて戦線を持続し、勝利的に「防衛」戦争を遂行するという立場を貫ぬくことによって、まさにその点に、連立政権を構成する第一の積極的利点を求めていたブルジョアジー左翼と、完全に意見を協調させうる共通の基盤をもっていたからである。この点ではむしろ、ミリュコーフ一派の方がより本質的な譲歩を余儀なくされたのであって、彼らがカデット中央委員会の名において主張した中心点——唯一の権力機関としての臨時政府の承認、強力の使用権と軍隊の指揮権の政府への帰属という要求は⁶⁶⁾、特にこの後半の部分に関してみれば、項目別の政綱外である宣言文の末尾に、「臨時政府は、祖国の救済のために、無政府的、非合法的、暴力的行動に対すると同様、あらゆる反革命的試みに対しても、最も精力的な措置を講ずるであろう⁶⁷⁾」という、極めて屈折した表現で加えられたにすぎなかった。

閣僚の人選問題においても、最大の譲歩を強いられたのは、ミリュコーフであった。外相から文相への変更を彼が拒否すると、閣内の「『七人の左派』は、その勇気を振るいおこして」彼の辞任を要求した⁶⁸⁾。それは、5月2日の晩のことであり、ソヴェート代表の連立形成についての合意、その「完全にして無条件の信任」の代償なのであって、閣僚の人選問題というよりはむしろ、人選問題の前提ともいうべき事柄だったのである。スハーノフは、この「ミリュコーフの打倒」の意味を重視し、この時をもってカデットは、政府党たることをやめて「右翼反対派」となり、その党内部の意見の相違は、対外的には、以前

65) ミリュコーフ、カデットに関する部分は、Миллюков, там же, стр. 109-111, 113. ソヴェート代表の「条件」については、Петроградский совет, стр. 327-8. 5月5日付政府宣言については、Революционное движение в России в мае-июне 1917 г. (Июньская демонстрация), Москва, 1959, стр. 229-230. (以後 Июньская Демонстрация と略記する)を参照。

66) См. Миллюков, там же, стр. 111-2.

67) Июньская демонстрация, стр. 230.

68) Cf. Sukhanov, ibid., pp. 249, 338-9.

のように「民主主義とソヴェートに対する憤怒の程度」によってではなく、「政府に対する対立の程度」によって示されるようになったと述べている⁶⁹⁾。たしかに、この時以後、カデットの政府に対する態度は、全面的支持という姿勢をくずし始めたことは事実である。例えばミリュコフは、5月4日の演説の中で、連立内閣に、「現在のわが二つの偉大な目標」、政府の強化と軍隊の気分転換をかちとる希望を托し、「われわれは、その目的が達せられている限りにおいて、新しい形態の臨時政府を支持すべきである⁷⁰⁾」（傍点引用者）と述べているし、また、5月9日に開かれたカデットの第8回大会の決議の中にも、同様の趣旨の言葉が挿入された。ネクラソフが指摘したように、カデットは、長い間反対してきたかつてのソヴェートの方式、「постольку, поскольку」方式に似た政府の支持へと後退したのである⁷¹⁾。

他の人選問題については、それが難航したわりには、さして重要な問題はみられない。カデットからは、ソヴェート代表より少ないことのない閣内でのポストの数が要求され、具体的なポストとしては、農業省の確保という意向が示された。これに対して、エス・エルとメンシェヴィキの指導層は、互いに譲り合い、相手により多いポストを与えようと努めた。連立政権の形成を決意する際に見せたあの躊躇が、まだ続いているのである。しかし指導的メンバーの殆んどを交渉委員として送り出していたソヴェート執行委員会は、陸軍省、内務省、外務省、農業省等々、一連の重要なポストは、すべて「民主主義」の手に確保すべきであるという要求を提起し、ゴーツは、エス・エル党の最後通牒という形で、チェルノフを農相にするよう要求した。ケレンスキーとネクラソフが、間を取持ちかけめぐって、最終案をとりまとめた。ここに、周知のような6人の社会主義者と、9人の非社会主義者からなる第一次連立政府の閣僚がきまり、5月5日、すでに述べた経過と内容をもつ新政府の宣言が、その誕生を公布するのである⁷²⁾。

ミリュコフの分析によれば、9人の非社会主義者のうち、ネクラソフを除く3人のカデット(シンガリョーフ、マヌーイロフ、シャホフスコイ (Шаховской, Д. И.), それにコノヴァロフ (Коновалов, А. И.) を含めた4票だけが、一致した進路をとりうる非社会主義的票であり、仮にこれに、しばしば社会主義者を支持してきた2人の「右派」(В. Н. リヴォーフ、ゴドネフ)を加えたとしても、社会主義者との比重は、6対6の同数であるとされる。そこで、キャスチングボートを握るのは、テレンチェンコとネクラソフ、及び、首相のリヴォーフということになるが、彼らの路線は、これまで左へ傾むく傾向を示してきた。そこでミリュコフは、「それは、たとえ『ブルジョア』政府だとしても、実際には、労兵代表ソヴェートの完全な『信任』と『支持』に全く値いする⁷³⁾」程度のものだと評価する。だが、ミリュコフと同じ厳しさをもって6人の社会主義者をみれば、凡そエス・エル党员としての自覚に欠けた典型的な防衛主義者、ケレンスキーと、自他共にツィムメ

69) Cf. Sukhanov, *ibid.*, p. 346.

70) Documents III, p. 1275.

71) Cf. *Ibid.*, pp. 1293-4.

72) См. Станкевич, там же, 129-132. Radkey, *ibid.*, pp. 173-6.

73) Миллюков, там же, стр. 121-2.

ルワールド派の代表的人物の一人と認めているチェルノーフとの間には、シンガリョーフとネクラソフとの相異に劣らぬ違いがあるし、人民社会主義者（エヌ・エス）のペシエホノフ（Пешехонов, А. В.）、リベラリストとナロードニキの中間に立つペレヴェルゼフ（Переверзев, П. Н.）は、名ばかりの社会主義者にすぎない。結局、ケレンスキーを除くエス・エル＝メンシェヴィキ・ブロックの3人（ツェレテリ、スコベレフ、チェルノーフ）だけが、当時のソヴェートが頼りとしうる社会主義的票であったといえよう。

この信頼に値する「社会主義的票」と「非社会主義的票」の背後には、それぞれ、ソヴェート執行委員会（エス・エル＝メンシェヴィキ・ブロック）とカデット党が控えており、双方の閣僚はこの背後に立つ司令部への責任を負わされ、従ってまた、それが必要とみた際には、いつでも政府から召還される運命にあった。政府は、双方の司令部が要求する施策をつき合わせ、妥協を求め合う場に変った。トロツキーは、これを評して、『『二重政権』は破壊されず、『たんに政府』に移されたにすぎない⁷⁴⁾』と指摘し、チェルノーフは、「どちらも自己の政策を実行するに足るほど強くはないが、その相手が自己の政綱を遂行せんとするのを妨げるには十分な力を持つ⁷⁵⁾」状態と規定する。だが、このことは、連立政府が、双方の要素によって中和され、階級的にみて無性格的なものとなり、積極的には何事もしえなかったということの意味しはしなかった。その後の「6月攻勢」が示しているように、連立政府は、ブルジョアジーがその第一の積極的利点として期待し、ソヴェート執行委員会もまた自ら提案したところの、あの「攻撃的行動」を積極的に推進していく。これをソヴェートの下部大衆の側からみるならば、8つの政綱のうち、してはならない唯一の条項が実行され、実行を期待された残りの条項が実現されないということなのだ。臨時政府への幻滅を連立政権への期待に転じたばかりの大衆にとっては、漸くにしてその出発点に立った連立政府に対して、かかる成行きを予測すべくもなかった。

5月5日、ペトログラード・ソヴェートは、圧倒的多数をもって次のような決議を採択していた。「労働者、兵士代表ソヴェートは、新しい臨時政府への完全な信任の意を表明し、民主主義に対して、革命による成果を固め革命を一層発展させるために、政府が要求している絶対的な権威を保証しつつ、この政府への積極的な支持を与えるように要求する⁷⁶⁾」。ここにはすでに、「постольку, поскольку」的な支持のあり方はみられない。ソヴェートを支配しているエス・エル＝メンシェヴィキ・ブロックは、カデットが全面的支持という態度をくずし始めた丁度その時、逆に、臨時政府の条件的支持から全面的支持へとその態度を変えることを求めたのである。今や政権の一端を分担することによって、連立政権への批判やその孤立化が、そのまま自己の不評と孤立につながる危険をも背負いこんだ彼らにとって、これは当然のことであった。彼らは、もちろん、各々の党内においても、その左翼反対派を抑え、党をあげて連立政権を積極的に支持する体制をきざぐ努力をすすめた。メンシェヴィキは、5月6日付の党機関紙「ラボーチャヤ・ガゼータ」において、連立政権を支持する論説を公表し、連立成立の最も重要な点は、帝国主義者の影響を

74) トロツキー、前掲書、194頁。

75) Chernov, *ibid.*, p. 209.

76) Documents III ,p. 1279.

完全に払拭する政府の新局面が確立されたことだと述べ、「有名な『の限りで』は、歴史博物館に移されるべき」であり、社会民主主義者は、「新しい臨時政府の存在の第一日目から、それによってとられる行動方針を、積極的に衷心から支持していくことが必要である⁷⁷⁾」と強調している。

それから20日後、5月25日、エス・エル党は、モスクワで、第三回党大会を開催した。第二回のタムメルフォルス党大会から10年間の中断をへて開かれたこの大会は、2月革命後、老大な「3月エス・エル」の流入をえて、つい3ヶ月前までの小さな非合法的グループの面影を一変させていたために、この雑多な大群が先ず「相互に知り合うこと」から始めねばならぬ始末だった⁷⁸⁾。しかし、すでに自党の代表も参加した連立政府の成立という既成事実の前にたたされた大会は、このような中で、戦争の問題、土地問題、民族問題と共に、大会の解決を迫る最も重要な課題の一つとして、権力の問題にも取り組むことになる。この問題で、大会の一方の観点、右翼の立場を代表したのは、アヴクセンチェフであった。彼は、革命におけるブルジョアジーの主導権を認めるメンシェヴィキの立場を受け容れ、社会主義政権は小市民層を反革命の側に追いやること、そして何よりも、国内での抗争は戦争努力を弱めるということを、連立政権擁護の論拠としていた。これに対して、もう一方の観点を、中央派の支持をうけたチェルノーフが代表し、左派も、あえてこれに逆らうことを望まぬ態度を示していた。孤立に面したアヴクセンチェフと、何よりも「党の統一」を重視するチェルノーフは、妥協を求めて協議し、チェルノーフの立場を強く反映した折衷案が作成され、その大会への提案は、アヴクセンチェフに委ねられることになった⁷⁹⁾。

採択された決議は、先ず、「連立臨時政府の創設に、一面では、都市と農村における勤労者民主主義の勢力が成長していることの証明を見出し、他面では、全ロシア的な破局がおきる危険から抜け出す緊急の斗い——新しい革命的ロシア、この現代ヨーロッパにおける《第三勢力》の最初の保塁を強化するために必要な斗いの、さけることのできない第一歩を見出す⁸⁰⁾」と評価し、つづいてさらに、目下の過渡的段階の特徴を、「ブルジョア・ロシアは、もはや今日の重大なる諸問題を克服することができず、社会主義の党は、まだ権力をその手中に握ることをありがたくは思わない⁸¹⁾」段階であると規定した後、次のように、連立政府への支持を約束する。「社会主義的民主主義の決議によって、社会主義者の閣僚のグループが臨時政府のメンバーとしてとどまり、それを通じて、民主主義の意志と、政府の内外政策に対するその統制が実現されている間、すべての分裂と混乱をひきおこす分子に反対し、政府に対して、その施策を遂行する上での最も強力な支持が保証される⁸²⁾」。

77) Documents III, 1283. 傍点部分は原文イタリック体。

78) См. В. М. Чернов : Перед бурей (Воспоминания), Нью-Йорк, 1953, стр. 324.

79) Cf. Radkey, *ibid.*, pp. 209-11.

80) Чернов, там же, стр. 326.

81) Radkey, *ibid.*, p. 211.

82) Чернов, там же, стр. 327.

もはやわれわれは、この決議について多くを述べる必要はない。このような決議の発想を可能とするエス・エルの思想的立場については、すでに第3節であれた。そこでも簡単に指摘しておいたように、「社会主義的改造期」に先立つ「移行期」の一段階としての連立政権は、ここでも、その存在を力関係という考え方によって正当化されている。彼らは、これによって、「勤労者民主主義」に有利に力関係が変化する中で、やがて、連立政府は社会主義政府へ転化するという見透しを想定させるわけだが、実際には、連立の形成は、ブルジョア政権の危機を救い、その結果、ブルジョア側に有利に力関係を保持するという役割を担ってしまったことに、彼らは気づかなかった。ソヴェートが、全権力を掌握するに充分の力関係に立っていたことを、10月の現実が明示した時、エス・エルは、対立する力の逆の側に、ブルジョア側の側に立たされていたのである。われわれは、残された半年の歳月が、かかる結末を生み出すに至る具体的な経過と契機を、次章において追求するであろう。

(以下次号)

Some Reflections on the Relation between the Coalition and SRs (I)

Kenjiro TAKAOKA

In this issue only the first part of this essay is printed. The second concluding part, with the summary of the paper, will appear in the next issue of the same journal.